

# 日の丸の責任と誇りを胸に持つて戦う



ソフィアデフリンピック ろう者サッカー日本代表

## 古島 啓太さん

FURUSHIMA Keita



摂南大時代の友人たちからの応援メッセージ

突破を図る古島さん  
(デフリンピック前の練習試合)

働きながら、サッカー選手として活動している古島啓太さん。20歳でデフサッカー(ろう者サッカー)と出会い、大学3年から日本代表に選出。世界選手権などに出場し、2013年7月はブルガリア・ソフィアで開催されるデフリンピック(聴覚障がい者のオリンピック)に参加しました。周囲の人たちのサポートによりサッカーを続けてこられたという古島さんは、「自分が頑張ることで、応援してくれた人たちへ恩返しをしたい」と意気込みを語ります。

### 前向きな努力が実を結び、さまざまな大会に登場

古島さんは3歳になる前に聴覚障がいを発症し、ろう学校の幼稚部で訓練を受けて育ちました。大きな音や声はかすかに聴こえますが、言葉の聞き取りは難しい状態です。ものの名前を覚えては発音する練習を行い、声を出して話す口話と相手の口もとや表情で読み取る読語を習得。後に手話も習得し、現在は補聴器を付けて暮らしています。いすれ社会に出ることを考えた両親の判断で、その後は常翔学園高から摂南大へと進学しました。

サッカーを始めたのは5歳。プレー経験のある父の影響で地元クラブに入りました。2つ目に入ったクラブは大阪府大会や関西大会にも出場している強豪です。クラブ内の競争は激しかったのですが、ゆっくり丁寧に説明してくれるコーチに恵まれ、練習しやすかったです。常翔学園高でもサッカー部に入部。先輩や同学年からのサポートを得て熱心に努力し、2年の夏からAチーム入りを果たします。3年の全国高校サッカー選手権大阪大会では準決勝で惜敗。あと一步のところで悔し涙を流しました。

ドリブルで仕掛け、効果的なパスで攻撃の起点となるのが古島さんのプレースタイル。障がいを言い訳にするまいと励み、技術を磨いてきました。それでも健聴者には分からぬ苦労も味わっています。雨天の試合で補聴器がぬれると壊れてしまうので、外してプレーすると完全無音となり、意思疎通ができなくなってしまうのです。「大事な局面でパスを求める声に反応できず、もどかしかった」。聴こえない分、周りを見るなどを人一倍意識。ミーティングの際は読語できるよう前に立ち、分からることは積極的に質問したそうです。

### ゼミ、ろう学生組織でアクティブに活動

卒業後は摂南大経営情報学科に進学します。「今まで好きなことばかりやってきたから、社会に出たときに役立ちそうなこともやってみよう」と、居酒屋でアルバイトも経験。2年からは羽石寛寿教授のゼミに入りました。同ゼミは企業の労務管理をテーマとするほか、プレゼン能力の育成にも力を入れています。ゼミは一度も休まず、卒業研究では運送ドライバーの過酷な就業状況を分析。課題発掘のために経営者へのインタビューにも取り組みました。研究成果を発表する機会も多く、相手に伝わりやすく説明する術が身についたそうです。

「羽石先生は温かい方で、父親のような存在。面倒見がよく、悩み相談にたくさん応じていただきました」

全国的な組織「ろう学生懇談会」での活動も財産となりました。健聴者社会で暮らしてきた古島さんが同じ聴力障がいを持つ仲間と交流する、初めての経験で、これをきっかけに手話を勉強するように。「サッカー生活で自信がつき、いろいろなことにチャレンジしてみたい」と。全国のろう学生が集まる夏の集いのスタッフも務めました。

### 思いを共有する デフサッカーとの出会い

デフサッカーを知ったのは20歳のときで、友人からの誘いで大阪アジアンタールというチームに入りました。デフサッカーは

選手全員が補聴器を外し、完全無音で行います。審判のホイッスルが聴こえないため、反則があれば審判全員が旗を振って中断し、中断に気付かない場合はチーム全員が手を振って止めるときもあります。健聴者とのプレーに慣れていた古島さんは、最初はコミュニケーションに戸惑ったといいます。バスを出す際にいつ声を出してしまうのですが、聴覚障がいの仲間には聽こえません。長いバスは難しいので、常に周りを見てアイコンタクトで合図し、細かなバス交換。「これが聴こえない者同士のサッカーなんだと思いましたね」。それは新しい文化との出会いでもありました。同じものに興味を持ち、同じ苦労を味わってきた人々の存在。表に出せなかった感情を共有できるようになりました。

ろう者サッカーチームに参加して程なく、2011年の全日本ろう者サッカー選手権に出場。その大会に視察に来たデフサッカー日本代表監督から声が掛かり、代表入りとなりました。2012年5月のアジア太平洋ろう者競技大会では左ミッドフィルダーとして出場し、準決勝のサウジアラビア戦で先制ゴール。勢いに乗ったチームは初優勝し、同年の世界選手権と2013年のデフリンピック出場権を勝ち取ったのです。

「大学入学後はいったんサッカーから遠ざかりました。でももう一度、本気でサッカーをしたくなった」と古島さん。昔はプロにあこがれ、W杯出場を夢見る少年でした。「デフサッカーと出会ったことにより、夢は違う形でも実現できると知りました」

### 精いっぱい頑張る姿で感謝を伝えたい

自分たちの活躍でデフリンピックの認知度を高めるという新たな目標も生まれました。内閣府の調査によると、パラリンピックの認知度約94%に対し、デフリンピックは3%以下。スポンサーが集まりにくいことから渡航費の自己負担は高額になります。また、職場の理解も得にくいくことから代表を辞退する人も少なくありません。「世界選手権に出場したとき、A代表と同じユニフォームで試合に臨む国があったことがうらやましかったです。日本ろう者サッカー協会が

日本サッカー協会傘下に入るよう働きかけている」と。日の丸を背負う責任と誇りを胸に戦い、障がいのある子どもたちに夢を与える。統一ユニフォーム実現に向けて、健聴のプレイヤーに耳栓をしてもらい、デフサッカーを疑似体験してもらうといった活動にも取り組んでいます。

古島さんにとってサッカーは「人生の一部」。子どものころから父に「苦は樂の種」と教えられて育ち、サッカーを通じてさまざまな試練を乗り越えてきました。「サッカーをしてきたことで素晴らしい仲間や指導者との出会いがありました。今まで続けてこられたのも周囲のサポートのお陰。日本代表として頑張る姿を見せることが、応援してくれる人たちへの恩返しにつながります。デフリンピックでも悔いのないよう全力を尽くし、金メダルを目指したいですね」。瞳を輝かせて話す古島さんは、文字通り「見る者に勇気を与える」アスリートです。



### ふるしま・けいた

13年3月摂南大経営学部経営情報学科卒。シャープエンジニアリングに勤務する傍ら、デフサッカーチームの大坂アジアンタール、大阪社会人リーグ2部所属のSOGNO.FCで活動。大学3年からデフサッカー日本代表に選ばれ、第7回アジア太平洋ろう者競技大会(韓国・ソウル)、第2回世界ろう者サッカー選手権(トルコ)などで活躍。13年度のソフィアデフリンピックにも出場を果たす。大阪府出身。22歳。